

「サルビアの花」の記憶

「サルビアの花」の思い出ですが、最も古いのは渙垂れ小僧時代です。田舎の小学校の3～4年生ごろに、通学路そばの家の垣根に1列20株ほどのサルビアが咲いていました。連れだってサルビアの花をむしり、蜜を吸った記憶があります。足元には多くの花が投げ出されていたので、この愉しみは通学路を通る生徒皆にはオアシスのような存在だったでしょう。

次に思い出すのは「サルビアの花」の歌です。

1969年の早川義夫のソロアルバム「カッコいいことはなんてカッコ悪いんだろう」に収録された「サルビアの花」ですが、それを知ったのはもう少し後年のこと。耳馴染んだのはもとまろの歌で、1972年の「サルビアの花」でした。レコーディングはしたものプロ活動はしないという彼女たちの姿勢が、一層この歌を引き立てたのかも知れません。当時は衝撃的な歌詞でした。その歌詞を早川の同窓生である相沢靖子が作詞し早川が作曲したのですが、頭に浮かぶシーンを切り取ってそのまま詩にしたような素直さで、切れ味鋭い言葉が並ぶ歌詞には驚きました。美しいだけの歌ではなく、意味の深さを考えることが多い曲です。

ここではもとまろの曲と、早川の曲でYoutubeを転載しました。

もとまろ「サルビアの花」

<https://www.youtube.com/watch?v=A63ELtj4iH0>

早川義夫「サルビアの花」

<https://www.youtube.com/watch?v=fpLbF1ucHic>

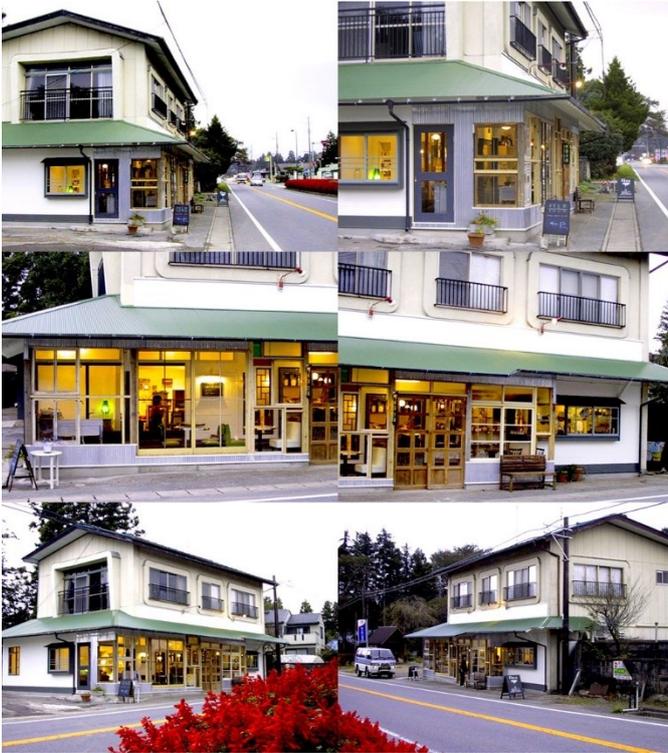
確か後年の渋谷でのライブに、もとまろメンバーのお一人が来場されたとき、この歌を早川に挨拶なしで歌ってしまったことのお詫びを伝えられたことがあったようです。今は音楽の世界から離れたその方に、早川はむしろ歌っていただいたことにお礼を伝えたというエピソードが彼の著作にあったことを思い出しました。

そして次に思い出すのは2002年10月のことです。



木草豆茶全景 (2022.10.24) 撮影

やはり「サルビアの花」の赤い記憶と言えるのかも知れません。場所は栃木県那須塩原市郊外の幹線道路脇で質素な建屋に立ち寄りしました。その時は営業活動で車を走らせていたのですが、その存在感が気になりました。商店街でも集落という感じでもない道路沿いの一軒の家に、「木草豆茶」という小さな看板が見えました。ここにお店が、と気付いて車を停めました。その向かいにある道路緑地にサルビアの赤い花が咲き並んでいたのです。10月の終わりに近い那須でしたが、花は元気に咲き誇っており、向いの建物の深いグリーンに塗られた屋根とのコントラストが映えていました。先にお店ではなく緑地



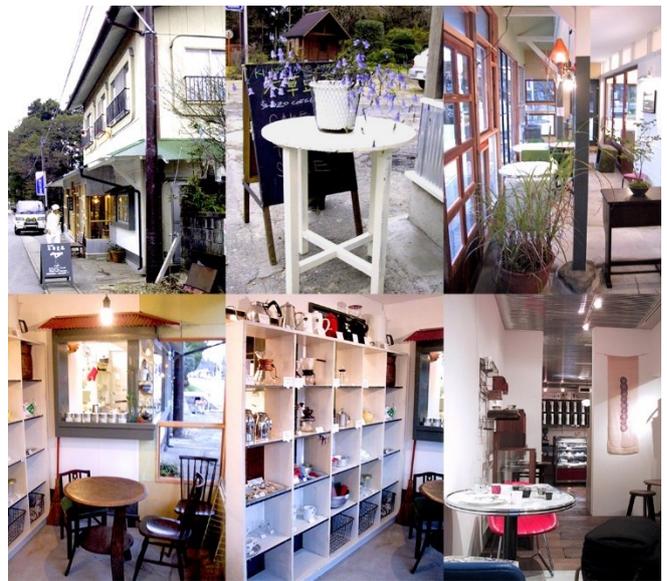
に向かいましたが、建物の佇まいが美しく、しばらく見つめていたと思います。お店の方をお願いして何枚か写真を残しましたが、そこは SHOZO さんのお店でした。

SHOZO オーナーの菊池省三さんとは直接お話ししたことはないのですが、当時もクラフトビーンズバッグなど、いくつかの商品をご採用いただいていた。そうした時にあるカフェのオーナーから伺ったエピソードを今も覚えています。その方はお台場でカフェを営んでいますが、SHOZO さんのコーヒーを仕入れたくて訪問してお願いしたことがあるとのこと。その時は菊池さんから自分のコーヒーではなく、友人の札幌の自家焙煎店を薦められて仕入ることになったようです。私も名前を知るコーヒー店ですが、なかなかできることではありません。

もし焙煎を生業とするロースターでしたら、そうした声に喜んで応じたでしょう。しかし独力でカフェを立ち上げて現地に漕ぎつけた彼は、声をかけてくれた若いオーナーの立場で答えを探したのだと思うのです。そうした人となりを知り、20 年近くのカフェの営みを知るにつけ、凄い方だな、と尊敬していました。その思いが一層強くなった「木草豆茶」でした。

ここはほどなく Mountain Drive と店名が変わるのですが、その後に惜しまれながら閉店されました。写真に見るように、この場所でカフェが成功して長く存在することは、難しいのかも知れません。しかし何事も始めて努力することが間違いだということではないと思うのです。

この場所で、冬の早い夜に暖かい電灯の明かりが灯ること。その明かりにホッとする人がきっと居ることでしょう。その時私がふと感じたのは、今にも山頭火の「お世話になりもうした」という声と共にガラス戸が開くのではないかという思いでした。田舎の生家もガラス戸の引き戸の玄関で、いつも軋ませながら出入りしていました。多分山頭火なら、一宿一飯の礼を言いながらわらじを締め直し、どこまでも続く青い山に分け入っていくのでしょうか。その時の私は、そうした人を支える原点のような場所をここに見つけた気がしたのです。商いという人と人を繋ぐ所作のすばらしさだったかも知れません。実際この後訪れた那須のカフェは、17 時過ぎというのに深い夜の中にありました。



その日は翌日の商談先である山形の東北萬国社さんに向かう途中でした。東北では地場に強いロースターの1社ですが、仙台長町モールの直営店「Cafe ルシ・エール」のリニューアルを進めており、何度か打ち合わせをしていました。そしてこの年の10月に「アリスカフェ」が開店します。開店日にオープニングセールスの先頭に立つ現社長の姿を覚えています。

コーヒーを生業とするロースターにも様々な特徴があります。東北萬国社はアットホームな雰囲気伝わり、いつ訪問しても楽しく商談ができた記憶があります。購買窓口の池田課長の笑顔に話が弾むことも多く、ともすれば本郷社長や中村統括部長とも話す機会がありました。そうした時間をいただいたことに今でも感謝しています。



東北萬国社本社とアリスカフェ仙台長町店

このころ各地の焙煎会社は販路拡大のための活動に全力を注いでいる時代でした。飲食業や観光業の衰退とコーヒーマーケットの変革が待たなしに訪れます。まずは直営店を立て直すこと、という戦略は妥当な方向です。ニーズとのずれ違いを調整することで、自社の力量を押し上げ、社員を啓蒙し、市場の信頼に応えること。東北萬国社も直営店の強化が図られ、今回の長町モールのリニューアルに合わせた新「アリスカフェ」でした。このカフェは更に2018年7月にリニューアルされます。それが現在の基幹店となる「萬國珈琲」で、2号店が2020年9月の仙台茂庭店です。ロードサイドの大型店で東北萬国社の仙台営業所に併殺されました。この年、東北萬国社は創業60周年を迎えています。

2022.11.10 有限会社カフェグッズ 小林文夫

© 2022 Cafegoods Co., Ltd.